

コンサマトリーな民主主義
豊泉 周治（群馬大学）

「民主主義って何だ、何だ」。シールズのコールがずっと耳から離れない会員も少なくはないのではないか。衆議院での安保法制強行採決が近づくなか、国会前のデモに結集する若者たちから聞こえてきたこのリズムカルなコールは、多くの知識人が語っているように、私にとっても衝撃的であった。「民主主義は、これだ」とコールは続く。ハーバーマスやアーレントに学んで哲学の言葉で考えてきた民主主義の可能性と現実性が、そこではリアルに繰り広げられているように思えたからだ。

本シンポジウムのテーマを若者論の観点から検討するように依頼されたとき、若者の活動はまだ局所的で、「歴史意識」というテーマは重すぎるとも感じた。いま、ムーブメントとなったこの若者たちの活動に寄せて、「暗い」時代を生きる思想と歴史意識の現在に言及することができるように思う。

1. 「暗い」時代の幸福な若者

この夏で一変するかもしれないが、このところ若者論のトレンドは「幸福な若者たち」である。2000年代になって格差と貧困が拡大し、その波にまっ先に襲われた若者の危機が盛んに論じられたのにもかかわらず、「暗い」時代を生きる当の若者たちは、各種の意識調査において「満足」「幸せ」とする回答を顕著に増加させてきたからである（2010, 豊泉）。その傾向はさらに強まっている。内閣府の調査で現在の生活に「満足」「まあ満足」と回答した20代男性の割合は、2008年の69.7%から2014年の78%にまで上昇した。中高生を対象としたNHK放送文化研究所の調査では、「とても幸せだ」「まあ幸せだ」が90数%に達するのだが、2002年から2012の10年間で「とても幸せだ」が顕著に増加した。多くの学者たちが実証する「暗い」時代を生きるはずの若者は、なぜ現在の生活に満足し、幸福を感じるのか。

私は「幸福の現在主義」としてこの問題に注目し、若者のコンサマトリー化する意識の現実と意義を探った（2010, 豊泉）。その後、社会学者の間で議論が広がり、古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』（2011）が出て、いまに続くトレンドになった。かの大澤真幸は、コンサマトリー化の議論を誤りではないがミスリーディングであるとし、より幸福な未来を想定できない「不可能性の時代」であるからこそ、若者はあえて現在を「幸福」として肯定するとした。古市は、現在の若者にとって「仲間」の親密圏の重要性が高まっているとして、親密圏の充足感こそが「絶望の時代」を生きる若者の「幸福」の本質であるとした。共通するのは、若者にとって社会の未来に希望はないということ。そして、だからこそ若者は現在を幸福であるとし、あるいは親密圏のいまを幸福に生きられる、というのである。いずれも、若者の幸福感の表層をなでるような解釈にとどまっている。私が提起したのは、「暗い」時代を生き抜く思想としてのコンサマトリー化であった。

2. コンサマトリー化の概念と歴史

コンサマトリーという概念は、日本では主として保守派の知識人によって取りあげられ、将来のことを考えずにいまを享樂的に生きるかのような、もっぱら否定的な価値観としてのみ流布されてきた。だが、この概念を社会学に導入したパーソンズの議論をみれば、インストラメンタル（道具的）な価値観に依拠する社会システム論にとって、それがいかに脅威であったかがよくわかる。パーソンズは、産業化の価値を内面化した内部指向型の社会から仲間集団に準拠する他人指向型の社会へというリースマンの主張に対抗して、コンサマトリーの概念を自説に取り込んだ。「社会は『それ自体が目標』であるのではなく……社会を超越する諸目標を達成する手段として把握される」。そして個人としての人間は、この上位の価値の実現に献身する「道具」である（「道具的活動主義」）、というのである。その上でパーソンズは、他人指向型の価値の出現（コンサマトリー化）は社会の構造分化の結果であり、この上位の価値と対立するものではなく、補完的だと主張したのである。

パーソンズの議論はコンサマトリー化を懸念しながらも、1950年代アメリカ社会を前にして、道具的活動主義による産業主義的な社会統合の理想を述べたものである。その理想は、1960年代の日本における高度経済成長期の社会統合の夢へと続いた。しかし、その理想と夢は1980年代以降の新自由主義政策によって虚構と化し、1990年代にはバブルとともに破綻した。そのとき、「暗い」時代にまっ先に投げ出された若者たちは、インストラメンタルな価値をコンサマトリーな価値へと適応的に変容させて、「能力主義（道具的活動主義）の虚構」の露呈したこの不平等な社会にあっても、なお「幸せ」に生き抜いてきたのである。そこには、インストラメンタルな能力主義に支配されないコンサマトリーな生き方への「ビジョンの変化の兆候」が内在している。

日本におけるコンサマトリー化の傾向は高度成長期の終わりとともに始まるが、なぜ2000年代になって20代男性の「満足」が大きく高まったのかも理解できよう。コンサマトリー化は若者文化に浸透していたとはいえ、男たちの人生は1990年代半ばまで確固としてインストラメンタルなシステムに組み込まれていた（そう信じられていた）。そのシステムの破綻が多くの若者（男性）にとって歴然となったのが2000年代だったのである。

3. コンサマトリーな民主主義

アーレントによれば、「暗い時代」とは「公的領域の光が奪われた時代」であるという。公的領域とは、人びとが共同的な活動と言論によって、互いにかけての個人として人間的世界に現れ出ることのできる空間であり、この空間を保持する権力を生成する政治的領域である。「その光が「信頼の喪失」「見えない政府」によって……さらには古き真実を護持するという名目であらゆる真実を無意味な通俗性の中におとしめる道徳的その他の説教によって消されるとき、暗闇は招来される」。シールズに結

《シンポジウム》
「「暗い」時代を生きる思想——歴史意識の現在——

集する若者たちの活動と言論は、公的領域のこの光を取り戻す運動とみることができるのではないか。

活動のスタイルも言論の内容も、コンサマトリーな価値に彩られ、個人を「道具」と化するインストラメンタルな安倍政治との対決を際立たせている。スピーチ（言論）に立つ若者の姿は、人間的世界に「現れ出る」ということの意味を、そして公的領域の光がそこに差して込んでくることを実感させる。語られる言葉からは、私生活の幸せを大切にすることが伝わり、いまや光の輪は互いに見知らぬ仲間たちを結んで大きく広がっている。一方、この若者たちを「就職できない」、「利己的個人主義」と威嚇した政治家の言葉は、人を道具とみる現代のシステムの民主主義とはかけ離れた姿を露呈させた。若者たちにとって民主主義とは「それ自体が目標」であり、「いま、ここ」にある活動と言論を通じて「これが、民主主義だ」というのである。その活動と言論から、安倍政治の正統性を左右する「権力」（コミュニケーション的権力／ハーバース）が生まれていることは確かだ。